

賀川豊彦の思想における「悪概念」

スティグ・リンドバーグ

序論

1. 賀川豊彦の紹介

本稿はアジアと宗教的多元性を念頭に置き、賀川豊彦（1888～1960）の悪概念を考察するものである。アジアのキリスト者であった賀川豊彦は、まず祖国日本では非常に著名な宗教者の一人であったことに留意すべきである。また賀川が生きた時代は、日本が当時アジアの大部分において強く政治的な影響を及ぼしたり、場合によっては完全に植民地にしたりした時期だったことを、賀川の宗教的活動を考える時に忘れてはならない。事実、賀川自身が「満州キリスト教開拓村」に協力した代表的な人物であった。これは賀川の神学にも繋がりがあられると思われる。すなわち、後千年王国主義者（Post-Millennialism）であった賀川は、「神の国」を人間の努力で地上に建築せねばならぬという。これが個人の救いを含むならば、社会制度の改革も含む。つまり、賀川はある種のキリスト教的なユートピア主義者であった。そのユートピア理念の根底には、生命（神）の必然的に進歩していく性質に対する確信があったのである。賀川は「宗教的多元性」そのものを提唱しなかったにしても、他の宗教に対して批判的あるいは排他的な姿もほとんど取らなかった。むしろ、アジアの諸宗教を総じて高く評価したのである。

なにはともあれ、おそらく他の日本人キリスト者の誰よりも国内外で伝道活動をしたのは賀川であっただろう。海外の活躍に関しては、時には日本政府の暗黙の了解の下に、時には日本政府の国策に逆らって海外伝道をしたという。賀川のアジアにおける宗教的な遺跡を把握するには、彼が抱いたキリスト教理解を慎重に検討する必要がある。それは別論文に回したいのだが、さしあたりここで言うべきは、東アジアでは、賀川の注目は明らかに中国に向いていたのである。賀川は韓国にも足を運んだが、八回にわたる中国への訪問に比べるとすこぶる少なかった。また賀川の言論の中でも、韓国に触れる文章が同様に著しく少ないという。もう一つ指摘すべきは、論者の知る範囲では、賀川は16歳の時にキリスト教に帰依するまでは「悪」を意識していないということである。これもとても意味深い事象である。では、一先ず以下の文章で、キリスト者の賀川の悪概念を考察したいと思う。

2. 問題設定

多才・博学の賀川にとって生涯前半の第一の問題は「悪」であり、後半においてもその問題は姿を変え、宇宙の目的の属性の一つとして「悪」を捉える「生命芸術」となったのである。その問題設定の見直しに関連する賀川の多面的な「悪概念」における①「実在理解」、②「悪と苦痛・苦悩との関係」、③「生命芸術としての悪」の三点に焦点を当てることによって、少しでもその奥深い問題意識を明確にしたい。

「悪」に対する決定的な対応は、キリスト教の通説においては肉体的な死や終末に託されるのに対して、賀川は歴史的な観察を通じて、いわゆる人間の精神的な進化による「悪」の克服を主張するのである¹。この現世的な「克服論」の背後には、賀川の聖書解釈の他にもいろいろな思惟が働いていたのであろう。論者の考えでは、賀川の現世における「悪」の克服論の形成のもっとも重要な要因は、彼のキリスト教入信及びその後の数回にわたる神秘体験と融合した科学への熟達から² 生み出された「楽天観」³ と、青少年期から熱烈に支持したダーウィンの「進化論」なのである。しかし次第に賀川はダーウィン流な「進化論」から自分の流儀の「進化論」に移行していく。この入信並びに神秘体験による「楽天観」が、全生涯に一貫した基本観念としての「進化論」と結合し、新しい「キリスト教的進化論」に帰結したのではないかと推測できる。「つまり、(賀川の恩師である宣教師) ローガンとマイヤースの人格にふれ、信仰にふれ、キリスト者になった賀川は、万物の進化という枠組みは残し、賀川のいう「無神論的進化論」より「キリスト教的進化論」へ移行したといえないだろうか。」⁴

賀川は様々な角度から悪問題という難問を突き詰める。たとえば当時の有力な諸学説や最先端の科学的な知見などを武器にし「悪」という長い伝統をもつ謎を解き明かそうとした。また賀川の「悪概念」を考察する際に忘れてはいけない事は、彼のキリスト教信仰の産物である「楽天観」の他に、数人の思想家によって教えられた動的な宇宙・生命観である。とりわけアンリ・ベルグソンの『創造的進化論』⁵ やピエール・テイヤール・ド・シャルダンの『神のくに・宇宙讃歌』⁶、また内村鑑三の「動的宇宙論」⁷ などがそれらの代表である。

もう一つ取り上げるべきは、賀川の時代背景である。日本が近代化を図ろうとする最

1 全集4巻、378-379頁。

2 全集9巻、31頁。

3 全集9巻、13頁、アスキラスの話について言う「たゞ不幸にして、今日では彼の楽天方面が伝わって居ら無い。それは劇の後尾が失わはたからである。」。

4 雨宮栄一、『青春の賀川豊彦』、新教出版社、2003年、133頁、括弧は筆者。

5 アンリ・ベルグソン、『創造的進化』、合田 正人訳、文庫、2010年。

6 『神のくに・宇宙讃歌』、宇佐見英治・山崎庸一郎訳、みすず書房、1984年著。

7 『信仰復興のきざし』、1930年。

中であり、その近代化の一つの大きな行程として「産業革命」を熱狂的に遂行した結果生じたスラム街の事象と「資本としての人間観」が、賀川によって「社会悪」と呼ばれるのである。その当時の日本のキリスト教界の大部分は信条主義かつ福音主義（個人の告白上の救いを重んじる）だったのであり、更に言うならば精鋭主義でもあったため、社会制度における不条理や罪などには注目しなかったのである。そうした中で、アメリカの「社会的福音」に感銘を受けた賀川はしばしば当時の日本のキリスト教界に批判を浴びせるのである⁸。言うまでもないが、これが賀川のキリスト者としての位置付けの困難さにつながる要因でもある。

I. 賀川豊彦と「悪」の出会い並びに悪問題における思想発展状況について

後に賀川の悪概念との関係で彼の实在理解を検討するが、結果としてその实在理解は完全に「価値」の上に成り立つ。そして更に「価値」というのは、たいがい人の「良心」と緊密な関係を持つのである。そこで青少年時代の賀川の「良心」はどのようなものだったかは検討を要する。実は、賀川自身の言葉はその辺の手がかりを備えてくれるのである。その記述における特に注目すべきところは、いわゆる雨宮の呼ぶ「潔癖感」なのである。では、その潔癖感はどういうふうに来たのだろうか。まず、賀川の父や兄から受け継がれたものだとはいくも想像しにくい。むしろ彼らが放蕩的な性質の持ち主だったと評価される。キリスト教は道徳や良心を重んじるが、面白いことに、賀川の場合は、キリスト教に帰依する前から強くその潔癖感を披歴する⁹。賀川自身も『神と贖罪愛への感激』で自分の潔癖感に多少触れるのである¹⁰。かくして賀川は身内や学友と比べて著しく明確な「潔癖感」をととも早い時期から示す。この事象は論者にとってとても興味深い問題でありまた賀川の悪概念にも相当な関係があると考えらるべきであろう。

賀川の悪に関する思想が、賀川自身の筆から五つ、そして論者の推測で一つ、合わせて六つ程の分岐点を経た事を指摘したい。一つ目が1921年に著された『イエスの宗教とその真理』の中で言及されるものである。「私の一生の研究の題目は宇宙悪の問題である。一六歳の頃から、この問題が私を把えた。そして私は悪の方面から宇宙を研究した時に、悪をはねかえして進む力が、その中にあることを発見したのである。宇宙には大きな秘密がある。」上述にあるように、賀川の16歳の一年はとても刺激的な年だったのである。家の破産、保護者との絶縁、またキリスト教への入信などの年であった。従って、困

8 全集 21 巻 179 頁。また別個に、土肥昭夫は賀川を「正統派」と過激な自由派の『はざま』に位置づける。土肥昭夫、「日本キリスト教史における賀川豊彦の位置と役割」、『賀川豊彦研究』、第 11 号（5 月 19 日 1987 年）：17 頁。

9 全集 3 巻、383 頁。

10 全集 1 巻、192 頁、全集 3 巻、382-384 頁。

難に満ちた青年賀川が「悪」という課題に目を向けるのももっともなことであろう。同時にその「悪をはねかえして進む力」の発見は恐らくキリスト教入信につれて新しい希望や信仰という力を見出し、厭世観から楽天観への推移の出発点でもあったと推測するも難くないのである。

ところが、「発見」といえども、未だ「秘密」が残る、つまり謎を残すような「発見」だったのである。というのも、当時の宇宙研究にあっても、自然科学的な分析によっては宇宙悪の説明が付かなかったという証言なのである。賀川の悪問題を含む宇宙研究は死ぬまで続くが、その「秘密」は自然科学だけでは解き明かされないのである。そこで賀川は自然科学的に検証するのではなく、何らかの前提から思想を展開する。いわゆる「先験・アプリアリ」の世界に、飛躍せざるを得ないのである¹¹。その多くは、比喩や表象を通じて表現される。このことについて岸英司が次のように洞察をする。「確かに賀川の書き方をみると最初に合目的性を前提としていてその論理は帰納的であるよりも、演繹的である印象を否定できない」¹²。

二つ目の悪理解の転機は賀川の19歳の時の事と見ることができる。賀川の記録によればこの悪問題への探求の始まりは二つの年に分かれる。上記の16歳の他、自身の19歳の時であると回顧するのである。「宇宙悪の問題と取り組んだのは、私の十九歳の時であった。その後私はいそがしい日本の社会運動の暇をぬすんで『宇宙悪とその救済』を研究し続けた(略)」¹³。この16歳と19歳という、いわゆる相反するように見える悪に対する取り組みの始まりをどう解釈すべきかについてであるが、論者の考えるところでは賀川の19歳の時の危篤とそれに伴った命の価値や宇宙の秩序を疑った帰結として更なる意味で宇宙悪を見直したのではないだろうか。

三つ目の転機は賀川自身の記録によるものではなく、論者の想定する所なのであるが、それは賀川が神戸のスラム街に住み着いてからあらゆる人間の墮落に日々身近に晒された結果ではないだろうか。かつては個人的かつ思弁的だった「宇宙悪」の探求という観点から、より現実的かつ体系的な「社会悪」という観点への移行である。そこで賀川は時の優勢なさまざまな社会科学の学説を活かし人間の環境と悪(墮落)との繋がりを綿密に研究するのである。その「環境論」のかたわら、「人種起源論」や「優種論」など、現在ではいくらか差別的に響く学説をも社会悪の研究に際して参考にしたことが後には批判されることになった。この研究は1915年に発行された『貧民心理の研究』にまとめられた。武藤は、賀川の研究には軽率なところがあることを指摘しながら、この著作について次のように評価する。

11 全集4巻、47頁。

12 岸英司、「宇宙の目的」理解のために(2)、『賀川豊彦研究』、第12号(7月14日1988年)、3頁。

13 全集13巻、291頁。

この貧民を対象にした第三の「悪」検討の分岐点は、賀川が晩年に至るまで保つ一貫した観念を明らかにする。すなわち、「悪」の起源に自然の所があれば人為の所もあるということである。この自然的な起源は大正十一年発行の『生命宗教と生命芸術』において、更に昭和三十三年の大著である『宇宙の目的』においてつぶさに敷衍され、「生命芸術」と名付けられることになる。後者の人為起源の悪は「道德悪」と規定され、その特徴及び解決は幾多の論文に散見されるが、さしあたり人間の自由意志（宇宙の選択の組み立て）に限定され、そしてその修繕が宗教の領域だと賀川は主張する。

四つ目の思想発展の転機は第一次世界大戦の直後の出来事である。生涯を通して、科学や人間の進歩力の提唱者である賀川には、啓蒙時代の楽観主義の精神が彼なりの仕方で受け継がれていると推定することができるのである。それに賀川が育った長老派の予定論と神の全能性という教えが彼に意識的に無意識的に働いていたのであろう。その反面で、世界的な大殺戮をもたらしたその大戦争（The War to End All Wars）は賀川の悪概念を如何に左右したのであろうか。それは賀川の悪に対しての探索とその決着の要求に重大な切迫感を与えたのである。

五つ目の転機は下に叙述するように、太平洋戦争の直前に起こったという。この新しい立脚点が恐らく、賀川の「悪概念」において最も意義深い見直しだと思われる。というのも、従来賀川の思弁的な第一の問題意識だった「悪」に対して、今度はそれを論理のみによって解き明かすのを断念し、考察の視野を拡大した立場（目的や芸術）から突き詰め直すのである。数回の悪概念の変転においてもこれほど大きなパラダイムシフトは無かったであろう。序論に記述しているように、「生命芸術としての悪」が本稿の一つの題材であるため、後の章でこの課題を分析するのだが、さしあたりこの重要な見直しについては賀川が次の通りに回想する。

太平洋戦争が始まる少し前から、私は宇宙悪の問題を宇宙目的の角度より見直し、宇宙の構造に新しい芸術的興味を感じるようになった。それで、私は、それに結論を出すことをいそがないで、宇宙の一大演出をただみておきたいと思う気がする。しかし、私が、あまりひとりで考え込んでいることも周囲の人々にすまないで、私の宇宙の見方の一端をここに発表し、宇宙芸術の味わい方を世界の人々に知ってもらいたいと思うのである。¹⁴

六つ目の転機は太平洋戦争の直後に起こる。この変遷は宇宙目的をめぐるものであり、自然科学における進歩や発見をもって、ダーウィンの無目的論を新たに反論する挑

14 全集13巻、291頁、傍点は筆者。

戦なのである。これは1947年に発行された『宇宙創造と人生再創造』に採録されている。恐らくこの自然科学における宇宙の目的性の裏付けは世界的数学者であったヘルマン・ワイルの研究（「群論と量子学」と「物質と意識」）に基づくのではなかろうか¹⁵。

まことに最近の宇宙観は甚だしく変化した。その一つの実実は目的論の構造、即ち Teleological というか、合目的宇宙観が物理学、化学、生物学等によって頭を上げてきたことである。（略）ダーウィンが脱ぎ捨てた目的論を、もう一度指向性を明示する近代電子生物学が拾い上げて、宇宙には目的がある。物質の奥に目的をもった大精神がはたらいていることを新しい科学は我々に指し示すのである。¹⁶

II. 賀川の著作における悪概念の時系列的な分析

1. 『人間苦と人間建築』（1920年刊行）

成人となった賀川の初の学術的な論文である『貧民心理の研究』における悪概念については既に触れた。そこに付け加えるべき指摘が一つある。それはいわゆる賀川のいう「貧民心理」が、全人類にある程度浸透している「罪」そのものであるということである。したがって、「貧民心理」は経済的に苦しんでいる人のみに限定されず、「一般人の心理には、賀川の主張する貧民心理がいくらかは潜んでいる。」¹⁷ 『貧民心理の研究』の次に触れるのは1920年発行の『人間苦と人間建築』である。この著作の中で、表題通りに賀川が人間の苦悩を人間の発達（建築）と結び付ける。5年前の『貧民心理の研究』に反して、この時点での賀川は「悪」の探求に関して、以前の物質欠如という論点には触れず、いくらか生理的ながらも専ら哲学的に「苦」を解明しようとする。ただしこの書で明らかになる点は、この時点での探求がある種の飛躍を含むことである。つまり本書での「悪」の扱いは比喩が多い。この初期から中期の移行期にある賀川は、分析的、論理的な解明を諦めるまでしないにしても、「戯曲」という題材でもって著しく比喩や逆説、つまり表象の世界に移りゆくのである¹⁸。

生理的な苦痛に関しては、賀川は進化論的な視角を取り、目的を見出す。概していうならば、それは生体が下等から高等へ進化していくにつれて、生理的な機能（とりわけ神経機構）が発達し、そして苦痛の感受性が強化されていくということである。従って、感受性が強化されればされる程その生体の存在を脅かす危険を警告し生存を守るのである。ところが、賀川にしてみれば、苦痛が更なる危険の予知という、いわゆる善き意味を持ち

15 全集4巻、42頁。

16 全集4巻、40、43頁。

17 全集8巻、570頁。

18 全集9巻、3頁。

ながらも、現実性を踏まえると究極的には彼の納得いくような意味が見出せない。すなわち賀川の人間理解に従うとそのような探究は受け容れることができない。この虚しさが賀川の神学の特色を示す表現でもある。賀川言葉を借りてその論証を裏付けたいと思う。

「苦痛は神秘の中の神秘である。(略) 警告としては峻厳に過ぎ、刑罰としては余りに苛酷である。苦痛は生あるものの受けねばならぬ宿命である。そしてこれを正直に考え込むならば、生そのものをも疑いたくなる。」¹⁹

悪や苦痛の原因に戸惑いながらも、賀川はこの書で苦痛の起源を推測する。それは「誤謬」に連動するのである²⁰。『人間苦と人間建築』ではその「誤謬」という言葉の意味が厳密には説明されないが、後の著作（とりわけ『宇宙の目的』）では「悪」は「誤謬」に起源があると主張される。しかし上述しているように、賀川は「苦痛」と「悪」との区別を厳密には守らないと数人の研究者に指摘される。さしあたり本書で触れられる「誤謬」は次の特徴を含むものである：①人間性には根本的誤謬がない、②人間の誤謬は時間上で修正されていくはずである、③誤謬の症状である苦痛は脳髄によってやがて解決される。ところが逆説的なことに、その脳髄が認識の中樞な器官であるため不具合があった場合にはまた苦に至る²¹。

『人間苦と人間建築』で、賀川は「道徳悪」を多少詳しく説明する。賀川にとって「道徳悪」というのは、人間の自由意志によって「善」を拒む或いは無視することである。そしてこの「道徳悪」が、自分が一つの人格であると自覚する人間にとっては最大の苦痛をもたらすという。別論文での論述であるが、更にその「人格であると自覚した人」（良心の鋭い人）のみ悪を離れて善につき、昏迷をすて、真直なる道に進み、はっきりした目的を把持して、延び上がる事が出来るという²²。この道徳悪は、新約聖書のローマ書7章に記述されている使徒パウロの思惟と嘆きを彷彿とさせるものだと論者は考える²³。ここで賀川は「道徳悪」の定義をある程度明確にするが、そこでかなめとなる「善」というものを明確にしない。ただ「善」の一つの特徴としては進化するものであると再び主張する。「進化の意味は？」という疑問を予期するかのように、賀川はその価値世界の考え方に關する大きなてがかりを提供する。

私は価値の世界の不變的法則と云ふものは、物理化学的法則の様なものでは無くして、

19 全集9巻、4頁。

20 全集9巻、5頁。

21 全集9巻、24－5頁。

22 全集5巻、23頁、傍点は筆者。

23 「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。(略) 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」「ローマ人への手紙、7章、19と24節」、新改訳。

全く『我』と云ふ唯一の範囲そのものの中にあるものであって、その『我』は実在即ち価値の直観であるから、我を組織する法則は何ぞと問はれるならば、それは、価値生活に於ける進化そのものであると云ふより外に何にも無い。それでもしも不変道徳がありますとするならばそれは『我』の存在とその進化性——愛の方向を持って居るもの—の外には何等不変的道徳は無いと云ふでも善いと思う。²⁴

また同書で賀川が初めて「悪」の非実在性を明記する。同時に「悪」の解決方法も論ずるのである。それは強く生きることである。

(略) もし悪を根本的なものだとすれば、それは非常な誤りである。悪は自由意志の創造的進化の上に横たはって居るものであるから、責任は自由意志の上にあるのである。で、自由意志に強く生きんとするものには悪は全く削減してしまうのである。そしてその上勝ち得ない善は人間の責任では無い。²⁵

こう書かれているが、疑問を招くのは賀川の「自由意志に強く生きんとする」の意味である。それを普通に考えれば賀川の言わんとする意味が伝わらないことはないが、厳密に考えれば人それぞれの動機や努力の能力が様々であるため、上手くいく人もいればそうでない人も決して少なからずいるだろう。しかし、賀川にとってはこの「善の進化」という、いわゆる人間の間での道徳のばらつき状態は問題ではないのである。聖書の「ピリピ人への手紙」の著者も似たような考えでいたと思われる：「(略) 私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです」。²⁶ ここで賀川と、「不変」かつ「普遍」(物理的法則の如く)な道徳を抱く伝統的なキリスト教が分かれると思われる。この道徳の「相対性」²⁷も賀川の進化論的かつ人間中心的なキリスト教観の一つの実と考えて差し支えないであろう。つまり時間さえあれば、人に潜んでいて伸び上がろうとする進化的生命力が脳髓の発達を通して成長(善の方向へ)させてくれるという信念である。あたかも宇宙意思が時間(歴史)を通じて自らの心を堂々と成し遂げようとしているかのようである。²⁸

この論文の冒頭に書かれているが、あたかも皮肉のように、「苦痛と悪を廃除するために更なる苦痛と十字架を覚悟しなければならない」とある。この理念はいわゆる賀川独特

24 全集9巻、30頁、傍点はそのまま。

25 全集9巻、30頁。

26 「ピリピ人への手紙、3章、16節」、新改訳。

27 「たゞ私は、小さい世界の標準で勝ちを判断し無くて、科学が教へてくれる—そして宗教が信ずることを勧めてくれる宇宙意志の漸進的飛躍の中に私の価値標準を移したいのである」、全集9巻、31頁、傍点筆者。

28 全集9巻、31頁。

のイエス観、すなわちイエスの一回のみの犠牲が宇宙・全人類の贖いのために完全な業ではなく、代々人間がその精神を自分のものにし、またイエスと同じように命を捨てるほどの覚悟をしなければならないということである。この方法によってのみ、賀川が想像する「大きな世界」が実現出来るという。「その時に私は私一個の苦痛が反って、社会の為の犠牲であり、更に大きな世界を産む為めの陣痛であることを思うのである。」²⁹

2. 『生命宗教と生命芸術』(1923 刊行)

『生命宗教と生命芸術』は賀川の哲学や神学の精髓を明らかにする大著である³⁰。本書では、主流のキリスト教に属している賀川がとても問題のある発言をする。それは「悪は実在では無い」という主張である。本書の序で、悪を「生命の進路の横たわる淘汰の標準」というふうの説明し、また後の章で「生命の延びて行く上に存在する価値の上の過程である」と特徴づけるのである³¹。賀川の悪概念についてこれ程の核心的な手掛かりはないであろう。この実在問題は後の章で集中的に扱われるが、本書の特徴は『人間苦と人間建築』に続いて比喩的また形而上的な表現が多いことである³²。

主流のキリスト教(ユニテリアン派を例外として)にとって悪が実在であるということが、賀川の非実在的な悪概念と比べて著しい分岐点を意味する。ただ留意すべきは、賀川にとって悪は物体や人格としては実在しないが、宇宙の法則の一つとして実在すると考えるべきであるということである。したがって結局使徒パウロがローマ書7章で描写する道徳的な内面的な葛藤は賀川も肯定すると思われる³³。「悪に怯えたものは、生命の力を見ずして、悪をのみ見る。(略)おまへの、刻々の努力に、悪は逃げ去るのだ。(略)強く悪に猛襲せよ。たとひ、倒るゝことがあるとも、神が再び立たせてくれる(略)。」³⁴

本書の出だしから分かることは、賀川の訴える神義論である。つまり、悪は神から由来するのではないという³⁵。ただし、別な論文で、逆に悪を神の責任にするように見える箇所がある以上、このわりあいにはっきりとした主張があくまでもその時点での賀川の神観に過ぎないと留意すべきだと論者は考える。また、その悪理解の変遷のさらなる傍証となる引用は次の様である。「今迄は、悪が悪だけにしか見えなかったものが、幕があくと

29 全集4巻、489頁。

30 全集4巻、489頁。

31 全集4巻、61頁。

32 全集4巻、47頁。

33 使徒パウロの記述では、悪に対する勝利は、イエスにあって神から賜れると考える。この「勝利」という厳密な意味はいろいろであろう。賀川にとっては、パウロの思想と重なるのはさしあたり成長に当たっての内面的葛藤を認めることである。

34 全集4巻、47頁。

35 全集4巻、47頁。

共に、それが妙な役割を務めて居るものであると云ふことがわかって来たのである。³⁶
 この「幕があく」という表現は、文脈からして賀川の日常的な慣習であった沈黙による神秘体験の下に、生命の内側を覗き込み様々な高次元の法則を発見する意味だという捉えた方が真意に近いのではないだろうか。³⁷

賀川は、オイケンのように、悪の起源は宗教の説明出来る範囲外だと認める。そこから悪の規定に、もう一度挑戦する。今度は「悪」を生命進化上の過程だというふうに説明する。悪は実在ではなく、生命の進化に伴う副作用に過ぎないという。その副作用は充分人間の感覚によって感じられ、いろいろな形態を取るものである。「生命の内容を創造し、生命の進化せしめんとするに当たって悪が感ぜられるのである。」その悪として感ずる例としては病気、疾病、低能、死亡などが列挙される³⁸。こうして宗教は悪を解き明かせないが、決してその問題を見捨てることもできないという。「宗教は悪を除くことは出来ない。(略) 宗教によって悪に勝つことが出来ると云ふことは、原始宗教から高等宗教に至るまで、凡ての宗教経験が示して居る。宗教は悪に勝つための信仰であったのである」。³⁹

ここで上述の悪の定義（「悪は生命の延びて行く上に存在する価値の上の過程である」）を詳しく検討したいと思う。まず賀川からすれば「生命」は延びて行こうとするものである。これは成長なり、拡大なり、進化なり、潜在している宇宙意志を意識しそれに即して強く生きようとするを意味するように考えれば良いであろう。その次に確認出来ることは「悪」は価値の存在を前提としている事である。しかし前述のように、賀川にとっての「価値」は生命の肯定以外には一定したものではなく、つまり個々人の置かれている状況の中で、良心生活を通して更に宇宙意志（神）に順応していくことである。それはあくまでも生命の肯定であり、人に内在している可能性を実現することでなければ他に説明のしようがない。問題はここでの「悪」の定義の後半にある。つまり、「生命の内容を創造し、生命を進化せしめんとするに当たって悪が感ぜられるのである」。この文の主語が抜けている。ここでは「悪」が目的語になっている。その前後の文脈を検討しても主語が見出せないのである。すると、「生命の内容を創造し、生命を進化せしめんとする」主語が不明である。

既に指摘しているように、賀川は「悪」をいろいろに区分する。賀川の時代の人間科学における論点の一つは、人間の行為を決める原因についてであった。つまり、人間の本性（生まれながらの偏向性）と人間が生きる環境（境遇）とによって、人間がどのような行為をとるかについての論議である。『生命宗教と生命芸術』で賀川は、近代人には

36 全集4巻、56頁。

37 全集4巻、52頁；9巻341頁；全集20巻、193頁。

38 全集4巻、61頁、傍線は筆者。

39 全集4巻、61頁。

「道徳悪」（選択性を含む環境）と「生理悪」（煩惱）が混同されている事を主張し、その結果、「凡て（の悪）を人間外の責任に帰してして了ふとして居る」⁴⁰ 動向を嘆き、またその延長に「性格悪」が俎上にのせられる。この「性格悪」は良心の領域にあって、それが生命の進化を意識した上で、それに合わさっていくか否かという問題である。またそれだけではなく、たとえば意識的に良心に逆らうような行為をしてしまい、すなわち「失敗」をした時 (cognitive dissonance)、或いは低迷に陥った時 (depression)、生命宗教にある再生力を信じれば、その信仰によって自分が引き上げられそして新たなスタートが与えられるという経験が許される。こうして「性格悪」に打勝つことが出来るという。問題はその信じるという力がどこに由来するかである。この章では賀川はそれを説明しないけれども、前の章ではそれに関連する手掛かりを出してくれる。つまり生命が人の中に勝手に湧いてくるものと説明する⁴¹。更に以下の引用にあるように、賀川はその湧いてくる、或いは爆発してくる生命の発生力のみならず再生力を強調し、またその性格悪に対する減免の働きを強調する⁴²。

上記の延長線上に、「福音主義」と「社会的福音」の間にある根本的な不一致の要因、すなわちちょうど上述の人間の「本姓・生まれながらの偏向性」(Nature) と「環境・境遇」(Nurture) との二者択一に対する問題意識がある。そしてさらにその問題意識に連なるのが、「福音」というもののもっとも適切な適用という問題である。そこで賀川は二者択一という立場を取らないで、宗教や教育を通じ予知「性格悪」（自由意思に対しての無意識や自由意思の健全な機能に対しての阻止など）の救済から進んで社会改善（境遇）を並行して並行して考える⁴³。

「道徳悪」を更に突き詰めていうならば、賀川にとっては「生命宗教を離れて道徳も無い（略）」と考える。⁴⁵ それから、現代人が道徳に関して区分したがるという誤解があることを更に訴える。すなわち「不変的」な道徳と「可変的」な道徳に分けることである。ある意味において賀川はその区別に納得するが、結局のところ一種しかないという。それは「生命の愛護」なのである。道徳の区分に対する賀川の肯定は次の道筋によるものである。「然し、道徳は昔から一つしか無いので・・・それは生命の道である。生命の实在から云えば、道徳は昔から不変的なものであって、生命の成長性価値から云えば、それは可成り可変的なものに見えたのである。」⁴⁴

悪に対しての勝利を得るにあたって、イエスの命の意味に関しても賀川は主流のキリ

40 全集4巻、64頁、括弧は筆者。

41 全集4巻、55頁。

42 全集4巻、58頁。

43 全集4巻、58頁。

44 全集4巻、58頁。

スト教を批判する。まず、人間の弱点としては、宗教の真髓より目を逸らし、その創始者の方に向けてばかりという傾向があるという⁴⁵。そこで宗教が偶像化される。本当の宗教はその創始者を称えるのではなく、その創始者の生き様を模倣すること並びにその創始者が経験した事象を自らも体験することである。いうまでも無く、この主張は悪に対しての勝利にも当てはまる。障害や不位置・不完全（悪）を前提とする「救」の意味について論じながら賀川は自らの理解するキリスト教の意義を披歴し、以下のような印象深い言葉を残している。

私はキリストは豪いと思ふ。然し、たゞキリストを神とする事によって人間が救はれるのではないと思ふ。キリストの宗教的体験を自ら体験することによって、始めて救の経験は得られるのだと思ふ。キリストだけが、神から来たとしたところで、私がそれが何を意味するかを識り、自らも神の子の体験に這い入らなければ、それは何の救にもならない。キリストが一人神の子になったところで、我等が捨てられて居るならば、之も駄目な話である。我等は救はれない。新しき生命と神の子の自由に這い入りたい。罪と悪に勝ちたい。キリストの神を自分の神としたい。この憧れがあるから、キリストの意識そして贖罪意識がよくわかるのである。⁴⁶

同節の中で、賀川は自分の「神観」を挑発的に披歴する。一度生命悪が生命の価値判断から出るという連関性を主張した後で、自分の立場を差異化するために、ライブニッツの「予定調和」論を拒み、またバトラー監督の「全備の神」論も否定する。論者はバトラー監督の「全備の神」という理念に関しては疎いが、論者の常識から捉えるならば、賀川は神が人間に、すべてを成功に導くための素材を備えさせてはいないと考えたのであろう。それはともあれ、賀川の考えでは、悪を宗教から取り除くことが出来ず、また宗教の役割は悪に勝つための信仰であると規定する。

「善と救」という章では賀川が「悪」を人間の責任だと再論し、その所以を自己の出来る範囲ですら善をなさない・尽くさないからであると述べる。この立論の根底に、先に触れたように賀川の「可變的道德」（ある種の「相対的道德」と考えてもそれ程大きな差し支えはないであろう）が横たわっていると考えられる。また「善」と「自我」との関係で、賀川が命題と類推を交えて更なる「悪」の規定を出す。それは「現状維持すらなし能はずして、退化と退嬰たいえいと衰亡を意味する（略）」。次に「進化」という意味を丁寧に述べてその過程の目的、いわゆる「自己完成」を説明する。「進化とは凡て、獨爾自存の世界に近づいて行くことを云ふのである。それで、より自由なる世界に這い入ると云ふことは、

45 全集4巻、63頁。

46 全集4巻、64頁。

自己自ら創造し支持し、完成し得る世界に近づくと云ふことである。」⁴⁷ ここで指摘すべきなのは、賀川にとっては人間が進化していくために新しい力が欠かせないという事である。その力が宇宙意志・生命（神）から流出し、また宇宙意識と表現されるのである。「然し新しき力の加はることのみを神の業と考へて、退化せしめる力を神の力で無い（略）人間の自由は自己の实在を支配する程度まで居るもので無いから、更に新しき力の加はるときには、それが凡て自己以外の内在的生命力よりくるもの（略）」。⁴⁸

いろいろな意味での「悪」を前提にしているキリスト教の中核的な信条である「キリストの贖罪」説は誤って「救い」と理解されていると賀川は考える。いわゆる代価・賠償的な説はあくまでも比喻であり、本当の救いとは何の関係もないという。その中で、抽象的な信条よりも、宗教的感覚の大切さを提唱する賀川は意外なことを主張する。つまり、キリストの感化（共感）にさえ救いが無いという。少なくとも、普通の場合にはこの感化が「人間の心に触れないものである。」⁴⁹ むしろ、性格悪を救済したのは人間意識の進化だという。⁵⁰

ここから賀川の「悪」と「救」また「贖」の相互関係という概念に立ち入りたいと思う。まずは賀川に言わせれば「悪は解決が出来ない、然し救ひ得ると信ずるのが良心宗教の本質である」という⁵¹。すなわち、哲学や宗教においては悪が解けないけれども救われることが可能なのである。この救いは生命の力、更に「再屈折の宗教意識」⁵²の機能なのである。信仰は、そこにアクセスするために必要なだけだという。しかし性格悪（道徳悪）を重視する賀川は、「救い」と「贖い」との間には大きな意味の差があると論ずる。その差異の説明の中に、新約聖書のペテロ第一の手紙 3 章 21 節における精神的な意味での救いに近い意味があるように感じられる。⁵³

賀川の悪概念におけるイエスの悪に対しての役割と聖書の第一ヨハネ書を著した者のイエスの悪に対しての役割が大いに分かると読解できる。すなわち、賀川はイエスの語る「義人ではなく、（助けを求める）病人のみのために来た」という文句を強調し、第一ヨハネ書に明記されている「神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」⁵⁴というところを、さすがに念頭に置かないようである⁵⁵。なるほど、そもそも悪魔

47 全集 4 巻、70 頁。

48 全集 4 巻、70 - 71 頁。

49 全集 4 巻、71 頁。

50 全集 4 巻、71 頁。

51 全集 4 巻、62 頁。

52 全集 4 巻、62 頁。

53 全集 4 巻、71 - 72 頁。

54 ヨハネの手紙第一、3 章、8 節、新改訳。

55 全集 4 巻、72 頁。

を否定する賀川が、ヨハネの訴える「悪魔のしわざを打ちこわす」という説明を支持するはずがない。だが、この不一致に関する問題はそこで終わらない。むしろ、まだまだ掘り下げられる余地があるであろう。たとえば、上記の賀川の強調するイエスの役割をはっきりとそのままと記述する一方、他方では彼が原因不明にする宇宙の悪（＝「不調」あるいは「故障」）を、ヨハネの考えた、全世界を狂わした「悪魔のしわざ」とそんなに無理をせず同一視すること若しくは置き換えることができるのではないかと論者は考える。

そうとは言え、上記の賀川の主張（イエスが病人のみに助けに来た）は、賀川が規定する「悪」の重要な役目である「生命の淘汰」とある意味で一致していると思われる。つまり、万人が生命の進路上身を置くことを選択しないだろうという、より現実的な洞察及び予期である。悪を乗り越えるには、選択だけの問題ではなく、いわゆる信仰をもって外（個々人より大きい「生命宗教」——再生力を含む）から助けを求めればよいと賀川は考える。いろいろな悔い改める方法がある中で、イエスが史上初めて生命の再生力を人間に告知したという考えの下でその再生的力に対する信仰をもつ他は、道徳悪を断ち切る力がないという⁵⁶。本書の結論と見るべきなのは、悪は解かれぬが克服され得ることである⁵⁷。

3. その他の論文

「参考文献の一次資料」に列挙されている諸論文の最初の二つについては、上の1と2の節で論じた。残りの七つの論文における悪の論証は、比較的点在しているため、それらをこの第3節にまとめて触れたいと思う。七つの論文を一つの節で扱うが、賀川の悪概念の形成の発展を把握するために、執筆順に触れていきたいと思う。『苦難に対する態度』（1924年）では、賀川は苦難の思索を行う。ここで賀川の胸を永らく煩わせていた「悪」と「苦痛・苦悩」との相互関係という難問をようやくすっきりさせ、初めて書面でそのひらめきを吐露するのである。その趣旨は、「悪」が精神の問題であり、「苦」はその症状であるというものである⁵⁸。

そして次に古代ギリシャを出発点にし、人間の悪と苦に対する態度を辿りながらその態度の変化をなぞる。その途中で改めて悪と苦の処理は宗教の役目であると主張し、しかしそれらの存在を解明するには、宗教でも哲学でも力不足であると訴える。イエスでさえ悪の解明をしなかったという⁵⁹。驚くべきことに、賀川がここでいきなりあらゆる悪とそ

56 全集4巻、75頁。

57 全集4巻、62頁。

58 全集2巻、121頁。

59 全集2巻、105頁。

の症状である苦の責任を人間から神へと一括して帰すのである⁶⁰。いずれにせよ、人間が不完全であるため、悪や苦などの源泉は分からなくてもよいと考える。むしろそのような思索は空しいものであるという。「苦痛に対する哲学的見解は知らない（略）苦に対する哲学の悟りなど、何するものぞ。」⁶¹ その空想をやめて生命の善き力を信じることを勧める。「只だ知る、『生命は苦痛より大なる事』を」。⁶²

『神と苦難の克服』（1932年）で賀川は「悪の効能」と題してある章で少しばかり悪について論じる。その延長上に、ダーウィンの「生存競争説」を取り上げる。が、不思議なことに、大抵の場合においてダーウィンの話をする時に賀川が批判的な立場をとる⁶³のに反して、ここでは肯定的に評価するのである。論者の読解では、その態度の転換は、本質的に楽天的である賀川が、同じ楽天性をダーウィンの「生存競争説」に見出した成果であると考えられる。ところが、その評価には微妙な表現も記述され、果たしてダーウィンを称賛しているか、嘲っているかが曖昧である。おそらく両義を含んでいるかも知れない⁶⁴。上述の評価のほか、この章に著しいのは賀川の悪に対しての楽観である。「悪さへ、進化の世界においては、贖罪者を発見するのだ。」という宣言である。

『宇宙創造と人生再創造』（1947年）では宇宙の修繕の⁶⁵原理が、イエスによって模範が示された「大愛の犠牲」で説明され、そしてイエスの犠牲だけが宇宙の修繕をこなすのではなく、全人類がイエスの犠牲的かつ連帯責任を意識した道を通らなければ宇宙修繕がなされないという⁶⁶。また「宇宙の修繕の原理」は、宇宙を貫く進化だけではなく、再進化という意味を現わすという主張がなされる。ただ、賀川の考えではその再生力は犠牲を必要とする。その深刻な信念は、『人間苦と人間建築』の序に記しているものと同様である。

『神と贖罪愛の感激』（1949年）では賀川は、人間の罪（不完全）に対する責任問題を別にして⁶⁷、本論文の大部分で著しく主流のキリスト教の教義を標榜するように論点を変えているとみなされる。つまりキリストの「物理的血潮」により神の義が和らげられ、罪深い人間と和解を図る立場を強調するのである。また、この論文のもう一つの特徴としては、『貧民心理の研究』と似た形で、賀川が再び人種差別的な観点から悪を説明するの

60 全集2巻、107、121頁。

61 全集2巻、106頁。

62 全集2巻、106頁。

63 とりわけダーウィン自身が後期まで標榜した「無目的論」が、賀川の強い論駁に晒される。

64 全集2巻、439頁。

65 「修繕」というのは、「悪」の破壊力の影響を前提するである。

66 全集4巻、3頁。

67 全集3巻、398頁。

である⁶⁸。この論文に一点の指摘すべき論旨が取り上げられる。それは「罪の分析」と題した章にある。賀川の罪分析では罪（道德悪）を七つの要因に分けるのである。①生の反対（殺人、憎悪など）、②力の衰退（無気力、無能力など）、③変化の問題（化石化、融通力の衰微など）、④成長の問題（縮まるのは一つの罪である）、⑤選択の問題（迷う事、人生のコースを誤るやうなこと）、⑥法則の問題（心理や生理を支配している諸法則から脱法、脱線するなど）、⑦目的の問題（理想から外れる罪、大宇宙の神を中心にしないこと）⁶⁹。

繰り返してはあがるが、この段落の出だしに記述しているように、賀川は「罪」を「不完全」として規定し、また人間の責任でないと主張する。

『永遠の再生力』（1951年）では賀川は「悪」を「厄介」に言い換え、三種類に区分する。それぞれの種類は以前の論文に比べて新しい内容ではなく、むしろ繰り返してである。その三つは①自然的厄介、②病老死などの生理的厄介、③心理的不完全である⁷⁰。この「心理的不完全」が賀川の悪概念においての核となる要旨である。つまりここで、「悪」を人間の進化する意識に結び付ける見方が確認される。賀川は意識の進化を三つの段階に分ける：潜在意識（subconscious）、覚醒意識（conscious）、全意識（full/complete conscious）。当然、賀川はイエスを全意識の持ち主と見るのである。本論文に限らず、賀川はしばしば「贖罪愛」と名付けるイエスの働き—いわゆる価値や倫理上の選択を間違えた人間と、宇宙の意志とそれを構成する（或いはそれに属する）諸法則（神）との調和を図る働き—についての理解を繰り返し説くが、論者の調べた範囲ではそもそも賀川は人間の誤った選択をする動機や源泉には触れない。確かに賀川は人類の進化の歴史上に「無意識」ないし「潜在意識」から「全意識」への過程を仮定するが、「原罪」あるいは「墮落」という聖書の説を肯定しない賀川にとっては、人間が神の被造物であるとすれば、なぜ完全たる神が不完全たる（無意識・半意識など）人間を創造したのかという問題が生起せざるを得ない。この問題と「結びに代えて」で論者が取り上げる賀川の「悪」に対するある種の偏見が論者にすれば賀川の悪概念に関するもっとも大きな問題だと思われる。

『天の心・地の心』（1955年）では、賀川は自分の宇宙観の全容を再論し、また改めて物事の「存在」の進化を説明する。簡潔に言えば、その過程は「物質」から出発し、それに「生命」が加わり、更に「心」（良心・自己意識）が加わり、その心も進化することによってようやく「自由自在」（全意識・神）に到達するということである。ところが賀川は「物質」がどこから来たかという問題は確定しない、否、自ら「出来ない」と告白するのである。「私は物質がどうして出来たかを知らない。（略）宇宙の組み立ては永遠に

68 全集3巻、389頁。

69 傍点は賀川の言葉である。

70 全集4巻、340頁。

疑問として残るであらう。⁷¹ また「目をさませ、私の魂よ、物質の神秘と、その不思議な幕明きに注意せよ！おゝ、私に取って、世界は至高の芸術の連続であり、不断の黙示である」。

物質の源が分からないが、賀川にとって物質そのものが悪でないことを断言する。「私は物質そのものを悪だとするものには賛成が出来ないのである」。⁷²

興味深いのは、賀川が、物質（とりわけ人間の体）に宿りまた様々な非倫理的な行為につながる衝動を如何に考えるかである。極端に言えば、いろいろな苦痛や苦悩を可能にする物質の存在とその必要性を如何に説明するかということである。賀川は次の言葉でもって弁解しようとするが、突き詰めれば、なぜ地球があるのかという単純な疑問にぶつかってしまうだけである。「肉は動く為めである。永遠に休息を知らざる尊き霊の表現せられたる動きを肉と云ふのだ。肉を離れて霊の地上に働く道がない。」⁷³ それはともあれ「善と悪について」という問答形式になっている章では、賀川は物質的な生命、また倫理的な生命を妨げるものが全て悪だと規定するである。

賀川の晩年の大著である『宇宙の目的』（1958年）では悪を集中的に扱う分量が甚だ少ない。しかし賀川の一生涯の悪研究の最後の洞察である以上それなりの意義があるであろう。本書の特徴は自然科学の優位性と賀川の達観である。悪の起源は「宇宙目的に到達し得ないことから起こる」と言い、「選択の条件に微細の故障が起こる結果」で説明する。また賀川は悪を人間の意識の進化に連動し、その意識が進化する程、悪が深まるという。また「人生の矛盾を感じる率が深くなる」。⁷⁴ とても関心を惹くことに、生涯を貫いて楽天主義者であった賀川は、原水爆という更なる人類の存続をはなはだ脅かす発明が進められた事態の中で、世界観を見直さなければならないという切迫感の下に、かつて徹底的だった楽天主義に、ある種の疑義を差し挟むように思われる。「(宇宙の) 出発目的の幕開きも美しく開き、途中の幕間も非常に希望のもてるものであるだけに、宇宙は悪の勝利するところだと即断することは、宇宙意志に対してすまないことだと思う」。⁷⁵ 最後に本書では賀川の神化論 (theosis) が繰り返されるのである。いわゆる人間が悪に完全に打勝ち、神と対等の立場を占める。対等の立場を占めるだけでなく、実際に神になる、あるいは合一するという表現が賀川に使われている。しかしその予言はあくまでも一つの予言・渴望に過ぎないことを忘れてはいけない。⁷⁶

71 全集4巻、63頁。

72 全集9巻、23頁。

73 全集21巻、178頁。

74 全集13巻、453頁。

75 全集13巻、452頁、括弧は筆者。

76 全集13巻、450頁、傍点は筆者。

Ⅲ. 結びに代えて

以上をもって、アジアと宗教的多元性の文脈を念頭に置きながら、賀川思想における悪概念を少しばかり明確にした。賀川は東洋人であり、始めには仏教、後にキリスト教の信奉者であったことが、彼の思想を本誌の題材とする出発点である。また賀川は単なるキリスト教の信奉者だけでなく、全世界を活動の舞台とした聖職者でもあった。彼の宗教観は、大正期の13年間を別にして、総じて排他的宗教の潮流に比べてとても進歩的かつ寛大的であった。それゆえに、賀川思想の多くは理解されずまた受け入れられなかったと思われる。だが近年、日本に限らず、「賀川豊彦」という名と彼の思想並びに活動が再評価されつつあることが分かる。論者の考えるところでは、賀川の宗教思想には様々な意味での多元性を見いだすことができ、そこには現代および未来へと向けた手がかりが潜んでいるのではないだろうか。

(STIG Lindberg 京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修修士課程)